

FOCUS UP

オールスター推薦出場でハネ上がった経験値。本間成美はテールエンドからの反攻を誓う



ほんま・なるみ / 1990年2月3日生まれ、秋田県出身。171センチ、右投げ。JPBA女子47期(ライセンスNo.517)。アイキョーボウル所属

今年的女子プロオールスター(JPBA WOMEN'S ALL STAR GAME 2022)に主催者推薦で初出場を果たした本間成美プロの2020-21年度ポイントランキングは85位。はるか圏外からの大抜きて、結果的にも最下位に終わったが、予選ラウンド9勝17敗1分けの戦績は「大健闘」と言ってい

☆
大会前は「1勝もできないんじゃないかと思っていたし、(所属する)アイキョーボウルのお客さんからも『シードプロから1勝でもしたらすごいよ』と言われた」という。しかし本間は初戦、前回覇者の丹羽由香梨に232:200で快勝。いきなりその1勝をつかみとった。「ものすごく緊張していた半面、丹羽プロは同じメーカーのボールを使っている先輩なので、けっこう冷静にその使い分け方などを観察したりしていました」

初戦に勝利したことと緊張もほぐれ、初日は7勝7敗1分けと、自分でも驚くほどの戦績で19位フィニッシュ。しかし2日目は「勝敗以前にローゲームが多すぎて(苦笑)」と失速し、最後は大方の予想通り?テールエンドの26位に落ち着いた。ちなみに、優勝した三浦美里は仲よしの同期生。本間と同じくオールスター初出場だった。

「彼女とは一緒に仕事をする機会も多くて、ずっと食事制限や筋トレを続けてがんばっている姿を近くで見っていました。それで私も、大会前は北小金ボウルにたくさん練習に行かせてもらったのですが…」

人気先行の重圧に苦しむも

本間は、アマチュアとしてのキャリアが皆無に近い異色のプロだ。ボウリングを始めたのは本八幡スターレーンにアルバイト勤務していた2011年、21歳のとき。センターのプロスタップに手ほどきを受け、1カ月後にはLBO(日本女子ボウリング機構)のU-30大会に出場。その後2度のトライアウトを経て、翌12年には同団体でプロデビューを果たす。

だが、LBOは13年12月に解散し、本間は翌年のJPBAプロテスト受験を決意。周囲の人には「今の実力で合格するのは無理」と言われたが、「放浪プロコーチ」の有元勝氏に「4か月間で10回くらい」の集中指導を仰ぎ、見事一発合格。成績は合格者15名中の10位だった。

JPBAデビューと時を同じくしてP★リーガーに。モデルのような長身のスレンダー体型が人気を呼び、全国のセンターからチャレンジに引っ張りだこの

存在となった。当時から現在に至るまで、その数は毎月コンスタントに2ケタを超える。

しかし、人気先行の重圧から、公式戦やP★Leagueでは「イップスのような症状」に苦しみ、予選敗退を繰り返した。膨らむ一方だった大会への恐怖心が薄らいできたのは、ここ2年くらいのことだという。

「歩き方の先生に出会って、歩き方を変えたらフォームがよくなって、投げるのが楽しくなりました。それでも成績は上がらないので『自分はまだこのレベルなんだ』と、悔しい気持ち

もわいてきて…。今回もすくいい勉強になったけれど、ひとつでも順位を上げたかったという悔しい気持ちがあります」

その悔しさこそが成長の糧。オールスター出場でイッキにハネ上がった経験値をバネに、本間はテールエンドからの反攻を自らに誓っている。

「最下位でも70ポイントもらえたし(笑)、アイキョーでも新しいトーナメントがある今年はランキングを上げるチャンスだと思う。もちろん優勝はしたいけれど、まずはシードプロを目指して頑張ります」



▲本間は本大会終了後に行われたエキシビジョンのチーム対抗戦でも健闘



2022シーズン展望/男子プロ編 復調した“2トップ”山本&川添と若き新興勢力に期待



▲昨年末にそろって復調を遂げた山本と川添の2トップが今期の男子プロ戦線をけん引する!

1月のシーズントライアル(ST)ウィンターシリーズ(3会場)で幕を開けたJPBA男子の2022年シーズン。3月開催の第43回関西オープンから本格的な熱戦の火ぶたが切られるが、今年は久々に2ケタを超える公認大会(STを除く)の開催が予定されており、がぜん楽しみなシーズンとなりそうだ。

☆

コロナ禍で2年くりとなった2020-21シーズンの公式戦優勝者(ST及びマスターズ戦を除く)は、表1に太字で示した6名のほかに新城一也(55

期/ポイントランキング23位)、藤村隆史(57期/同38位)、笹田泰裕(52期/同52位)を加えた計10名。渡邊雄也

(21年関西オープン)、加藤祐哉(同ジャパンオープン)、志摩竜太郎(同APA)の3名は久々の2勝目、初優勝は藤村(20年新人戦)、新城(20年ドリストカップ)、笹田(21年グリコセブンティーンアイス杯)、水野耕佑(21年新人戦)の4名で、水野は続くJPBA★SSSカップも制して一気に両目を開けた。

昨年大きな変化があったのは、JBCが競技者規定を改定し、会員のままプロライセンスの取得が可能になったこと。その先駆けとなった安里秀策は、優勝こそなかったが8試合の出場でランキング11位に食い込んだ。今年もナショナルチームメンバーのプロテスト受験が多数予想され、大きな潮流となり

そうだ。

だが、シーズンを通して中軸を担うのは、昨年末にそろって復調を遂げた山本勲、川添奨太の2トップだろう。山本は最終戦の全日本で3年ぶりに16勝目を挙げ(全日本は5勝目)、永野すばるを抜いてポイント、アベレージの2冠を獲得。川添は選手会主催の新設大会「JPBAプレイヤーズドリームマッチ」を制して永久シード権獲得のV20に到達した。若き新興勢力にとっても両プロの壁は分厚い。昨年はやや精彩を欠き、賞金

王の1冠に終わった永野も、20年3勝(APA、SSS、全日本の3大会で3連勝)の戦績と爆発力は断然。きっかけ一つでその再現は十分にあり得るだろう。

2月末現在、JPBAの年間予定表に記載されているポイントランキング対象の公式戦(STを除く)は表2の10大会。ほかにも「ドリームマッチ」の第2回大会や別途新設大会が開催に向けて調整中とのこと。依然収束の気配が見えないコロナ禍に邪魔されず、全大会無事に開催されることを願うばかりだ。

開催日	大会名	会場
3月17~20日	スカイAカップ第43回関西オープン	牧野松園ボウル(大阪)
5月28~29日	第9回グリコセブンティーンアイス杯	広電ボウル(広島)
9月2~4日	(仮称)ウェットアイカップ2022	東大和グランドボウル(東京)
9月14~17日	第15回MKチャリティカップ	MKボウル上賀茂(京都)
9月22~25日	中日杯2022東海オープン	星ヶ丘ボウル(愛知)
10月21~23日	コカ・コーラカップ2022千葉オープン	北小金ボウル(千葉)
11月3~6日	第44回S TORMジャパンオープン	稲沢グランドボウル(愛知)
11月19~20日	全館連プレゼンツJPBA☆SSSカップ2022	東京ポートボウル(東京)
11月23~26日	APAプレゼンツ2022 KING'S&QUEEN'S	(調整中)
12月9~11日	HANDA CUP第56回全日本プロ選手権	新狭山グランドボウル(埼玉)

※青字は男女共催

2020-21JPBA男子ポイントランキング上位20名

順位	氏名(期別)	ポイント	アベレージ	獲得賞金(円)
1	山本 勲 (44)	4,412	219.21	5,466,100
2	永野すばる (40)	4,221	215.90	8,530,500
3	川添 奨太 (49)	3,750	214.66	3,734,600
4	藤井 信人 (52)	3,080	212.94	3,870,500
5	谷合 貴志 (52)	2,504	209.64	2,576,000
6	和田 秀和 (48)	2,492	211.49	1,643,800
7	森本 健太 (51)	2,458	209.92	2,117,200
8	渡邊 雄也 (52)	2,235	207.30	1,983,800
9	高田 浩規 (52)	2,205	210.51	1,554,400
10	小林 哲也 (48)	1,908	207.39	1,463,900
11	安里 秀策 (59)	1,864	215.18	1,892,900
12	加藤 祐哉 (43)	1,843	202.47	2,086,000
13	斉藤 祐哉 (49)	1,812	210.85	1,541,200
14	甘糟 翔太 (54)	1,792	209.92	1,215,200
15	志摩竜太郎 (55)	1,691	204.00	3,853,500
16	山下 昌吾 (44)	1,679	205.08	1,251,000
17	水野 耕佑 (56)	1,669	208.05	2,329,100
18	佐藤 貴啓 (57)	1,587	208.30	1,246,000
19	小原 照之 (32)	1,584	209.69	1,126,000
20	渡邊 航明 (49)	1,572	207.38	710,000

※太字は当該年度優勝者